# 復元工事の流れ

## 1 基礎工事

工事前は道路だった場所です。確認された遺構を保護するために盛土しています。建物の強度を保つために、基礎はコンクリートとなっています。

## 2 木工事（加工）

木材の加工は大工による手作業で行われました。写真は手斧（ちょうな）と呼ばれる道具で木材の表面を加工しているところです。

## 3 木工事

木材は釘等を使わず、ひとつひとつ組み上げていきました。一階の柱は主に欅（けやき）を、二階では檜（ひのき）を、梁には主に松を使用しています。

## 4 屋根工事（土居葺き）

瓦を葺く下地として薄板を重ね葺きする土居葺（どいぶ）きを行いました。瓦は、発掘調査で出土した瓦を参考に、水戸の土を一部使って作成しました。

## 5 左官工事

2階部分の壁は土壁となっています。竹を格子状に縄で編んだ小舞（こまい）と呼ばれる下地の上に、土を塗っていきました。

## 6 練塀（瓦塀）工事

発掘調査で確認された4カ所の練塀を保護しながら、瓦と漆喰（しっくい）を使用し、外観を復元しました。

［発行・問合せ］水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課　水戸市中央1-4-1　TEL.029（306）8132
2020年3月発行

復元整備記念

# 水戸城 大手門

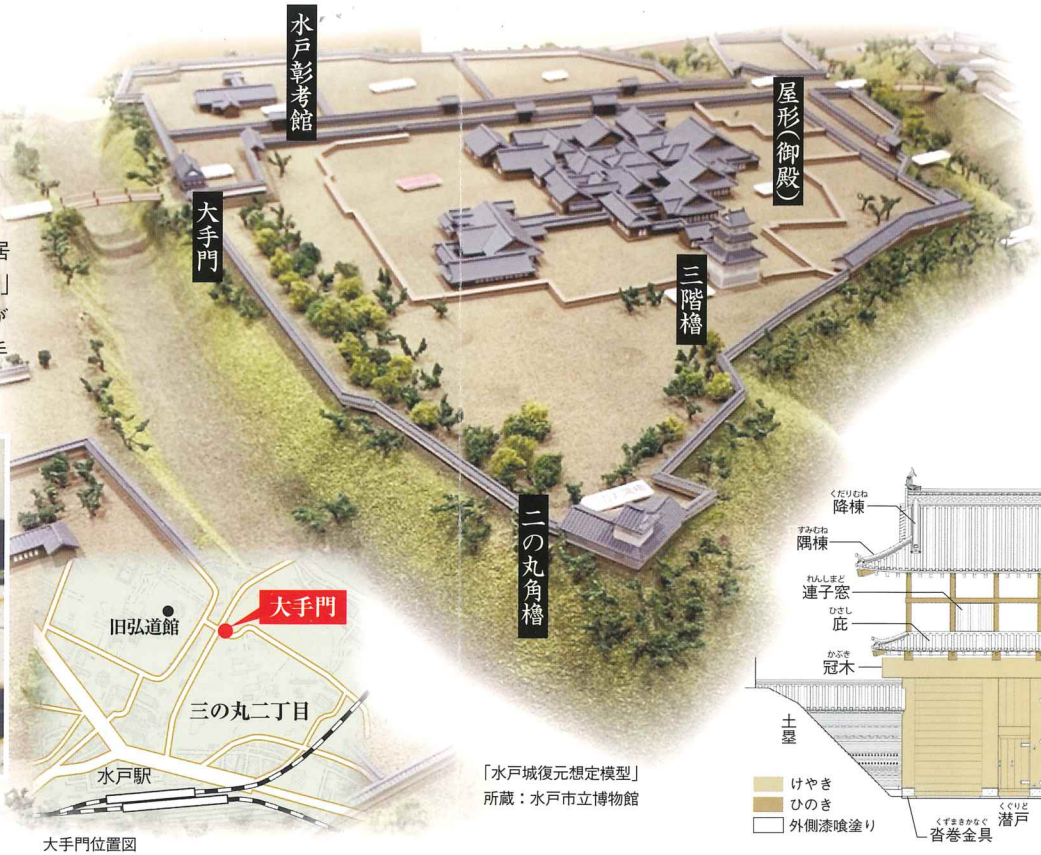
水戸市

# 水戸城と大手門

## 水戸城跡とは

水戸城は、水戸藩 35 万石を治めた水戸徳川家の居城です。東から「下の丸」「本丸」「二の丸」「三の丸」の 4 つの区画に分かれていました。最も重要な区画が二の丸で、三階櫓（さんかいやぐら）、屋形（やかた）（御殿（ごてん））、水戸彰考館（しょうこうかん）、大手門が建っていました。

「常陸国水戸城絵図」 所蔵：国立公文書館

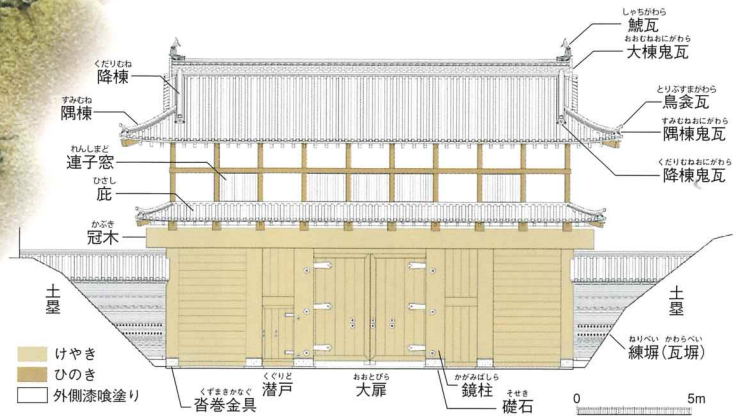



「水戸城復元想定模型」
所蔵：水戸市立博物館

大手門位置図

## 水戸城大手門とは

水戸城の正門にあたる、最も格式の高い門です。佐竹氏が水戸城主だった慶長 6（1601）年頃に建てられ、その後、何度かの建て替えが行われた後、明治年間に解体されたと考えられています。
江戸時代初期の様式を残す古風な城門で、土塁に取り付く城門としては、国内でも屈指の規模を誇ります。

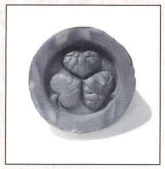



## 復元の根拠となった学術調査の成果

### 発掘調査

大手門が建っていた場所や寸法等を調べるため、6 回に及ぶ発掘調査を実施しました。その結果、大手門の 4 隅に大型の練塀（ねりべい）（瓦と粘土を交互に積み上げて作った塀。水戸では瓦塀（かわらべい）と呼ばれていました。）が取り付いていたことが確認されたほか、鯱瓦（しゃちがわら）をはじめとする大量の瓦や錠前（じょうまえ）、釘などが出土しました。

練塀（瓦塀）



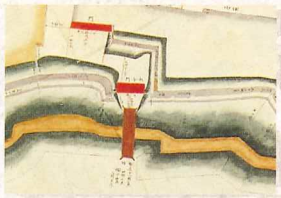
三つ葉葵

鯱瓦

### 史資料調査

大手門の寸法や建物の意匠を調べるため、現存する古写真や絵図資料を収集し、細かく分析しました。古写真では、建物の意匠や高さを想定し、絵図資料では、記載された寸法を参考にしました。

「大手門古写真」所蔵：文京ふるさと歴史館



「水戸城実測図」所蔵：茨城県立図書館

### 水戸城大手門の概要

| | | | |
|---|---|---|---|
| 構造 | 木造 2 階建て | 建築高 | 13.34 m |
| 建築面積 | 158.28 ㎡ | 外壁 | 一階：板壁　二階：真壁、竹小舞下地、上漆喰塗り |
| 延床面積 | 118.79 ㎡ | 屋根 | 入母屋造、本瓦葺（土瓦） |
| 桁行 | 17.18 m | 開口部 | 一階：門、潜戸　二階：連子窓 |
| 梁間 | 5.73 m | その他 | 大手門の南北に接する練塀（瓦塀）4 箇所をあわせて復元 |